



入
金
銀
紙
の
下
に
入
る

18
E
1.069
6



伊丹與



13
1089
卷

金玉神ちがむる美ことくた

里を義我弘本を悦一周縁の事

人のたのまをわけてふあふふ身とあいな人バ
義のふついでるなり一あはたると本者さ一
たごいほと吾礼と一一分はらよお海せむひはる
て色あうにたはねも魚一先王は法殿ふ
あつとまじがりてふ眼せんわうの徳はくよ
阿つたれん教てたこなりげ先王は法言ふ
ふ在はあてふと孔子を徳一わぬひ一
なり一年阿房れ必里見義弘つらぬあ

敵にたつひ後由和蔭一して吳國に金盟
と海をびたづひよまをいり人も金向後さ
一もあゝさる首とらうりんとに我ぬれさ
ゆる未日又人従へ改め城とを離る事二
里のて山あつとさぞ改ていあなる我ら
送とあつみりくともなく却せす又その
大地一はあつれたるさなる半とん付て幾ふ
退つちりまといたて一はふ飲ぬくくたさ
さあゝすといま。此あつとる也と暫くとも
お入て録長けきばはたよ半とれみま

てトなるそ人ちるはぐるふまごづひて
形はあよちいさふなり。とんとそ首を
くかやしく一ははるこれ小蛇となり。早む
へうそれんと見さるふ空あてき一はまの
一づけるびとんては門とあり蛇と
うけ二所はうとああなるは。豊入るや孫
あてたち海地ふりさ蛇喰ひぬくくたど
ろとこそた。幸なるはと。画符のたひを
なり。きれはひ。ひろりされけつハはき
はた。やれ格。すまの形の付らたといなる半

とよむる音一う長成徳神の意かハ坊ま
 ぐ今三ハ小蛇とわくしてハこびせとよま
 別する力なり一ハまハ蛇のこふらざる
 べうに命を大身の中身ハあわめて身
 神さう命の威さうやう一ハ身なれば
 大身此力を用ひの中身なれば小身此力を
 三ハに命を以て大身は鬼経小あうがに
 らん風きの葎と群を同ぬせげとらり
 物ら小我今日命あいなればとてよせら
 ちて教小たりひくそ大トヤれ小蛇と

如て至親小あう極ごと一ハはごめて由利
 ハ情大をさうれ去運とちりハ終ふ由示
 現なるべ一若教と氣會して一旦奉の
 愛あふよせの如てあるにべとこそあれあう
 づきを死て神一ニ交命あはよあざう
 一こくや海ハ大名ハ大名の行季とくハご
 け舟の耐ハ邦境とちりハ行時ハ行列と
 倫ハ軍由ハ乳律法承一傳ハ隊伍法
 個人奉とほう威とくやうして盗賊とた
 さく秘とまハち其由とお来のゆして



三十三

どうもいざう二世の勢地をたせしむ終ふ
 才又童子三方六千れきんぞくもそら
 勢きんぐれえ生とちうらん勢さうの
 障身乃三恵神と降伏すしくあての
 さうの勢と拂ひたぬふをててけ天後
 の軍ハ軍ハ宝洋のゆてを備へる貴金
 賊童子乃由獲れげんぞくハ逆者童子の
 うけ丸もやハ馬泉とじ百獲ハれちうき
 子多也ハハ勢多子と勢ハせん車と
 ト問やハ半るざうト極女申ふハあハ

殺さしと子同勢のちハ軍破らうト
 守りたぬふはまハ士農工商此業のりま
 け天の利益と勢とけりんをててて
 むめ守りとのぐハ定業の命とてんト
 勢来すてハそとをえ乃由勢と勢
 徳佛也勢とけりくなれととさいと利
 生の前使りけてりちと勢とてハ大勢
 あそはは補後述てん此とこくハ天
 さい王てん女又孝子のゆむせハ勢
 とけれが弘法大師乃とてんのんめ色

後佛の大事ハ与来をせり一なる生乃
期する西ハ後佛を格こぼるるさうこの去
交色定契の後田小あらん言菩薩の
万行を神玉に秘藏ありおたりと
とせたる事よしましくそを作といつま
うそよゆせざらんなる律由神祇乃
何人矢壯曰命た来りと獨一人新代
まて命もそらんやう一あうそらの
信なり一うは事よは合せぬれらぶ
れ何さうのり受あうそを秘けひ

定業亦能持の由らんはゆ修一毎
年正月七日乃篇小あゆそとこひ終
よ一の多小実だんねこれありらめく
せんがこれ首とういふけ月年二月下旬
而礼しあうの為一妻れ男女のうたさん
けい一神前小わしては殺たてまう
それより奥の跡入のあれは首事あのを一死
まてこも二天邪いハ半一うりて山其修
学んで凡あのを善と敷修ハ何の小似て
水声徳とら門水流小奇なる月水京なる

とぼくくこの跡つがのあゝとぞあやこゝろ
と御相して草を分りてむと折きてい
うのいもん當年九歳の女子一人隨つた
たびにみみましくこらあのみはうむく
水小舞又らまきて流すも久くはなりふ
きうまぬたといふうけと星をけまじバ
くまたのこて死かといふいやうもかた
其ゆふちひろれをくまのうつ再び終
ぶおんくさればまぬ上せん方なくは
下向一極色をまのるまたりとたえ

此利生あてちりたふといふあつとて
子を失ひてあつせんとのまに終つてそれ
む一やうれをやおこ一ゆふ老あはうく
まやをなまきバさう一孫室及王位つらん命終
時と徳一やこむるま貴れををやみぬれ
ハたのづうかまげうとあこころり次男よあ
神あところくあまをう一田畑の色はあま
たうと一まぬれ入まうくもたなくすう終の事
ハは合あく終つてうゆもを先陰ハう
つとはや七年れ星をわと終たうとまうま

ど色食ハ種者想れホーとあまうち佛非
と極るころ色おうに天女をそく此極色
さうだ眼くれもあけ此項どうもーうらあ
七回三の今日月あまきバとて隣あの特女を
よひ集ころうばうけつせんぞかせー
がふらやなれあん申三人巨刀籠る
あま竜のおとどろくこくふ下あうむい
とつち起て其申あり年此籠十日又た
極一人あうりまあ牙あうむらるおと極
くこれどうも肝と清ー是ハちる成ら

あうんごすかへあげちりが暫くあ
阿るーまぬもあの人くああこのまひ恐
ーながう四とせぞげはあんを空電まの
ふも短ちやとらみあらとせえん海り
何そそれのくあへ佛よい空法立さう路ひ
ー今暫く極うーあくと初とくはあ
編とさげままーく集うあのだまうと
とて振影る家極をればはてい想異れあ
らやまーやと他人のらよく恐れぬれ去
又母のあうーく極くーんれは其うさ



一昔ののりやうきりなしく月日を流し
 物成りして形ふれとろくくは神もかたに
 たふはうまひぬもせよ愛記ぬもあま
 秋子の想ふ似し人の思ふなごう焼し
 されあぬ側へ立ちあつて色ぬ身へ今
 けむりあつた何とてあられう又なる
 ち中右の魂うきあつてあひひ年月調の
 うりくはななくぬれなげさあせ
 みたそ人業余の人はなごうもあつて
 けせふとぬつて親のねのひをばはられ

よこたのうらひこきふうといふけは焼いけら
 先息あてられたや速くゆくゆく死せし
 とあてのふ其の西の山あて乳母や母人
 あはぐれまひせさあひひあつてをけら
 こころあふあひりうくあ羅の細をほり地
 赤亡室の細と一と新の山金れき塔え
 まがれ川のまよふ玉とあつたる新のあ教
 百とあむせと並く綿流れ帆とあまの
 うけさんご時の車よちああ柄とつそ
 るんやふくれ牛ふうけ庄えあつてあ

あめこの宰料つきたあひきりなら
 親のあ入れたう一庵侍たうなる親まごを
 なんがら親のあこの負業つあといは
 今すこ一伝の功やうとあつては
 こはくさせあつはげさうけああなる
 はあくあうてはあを親ああよとあ
 一がああむともあくこあともあく
 あくあうたうこあく親のあを親れ
 うくくああうてあこあ聞人ああ
 甲ひとあ一はああをあてあればよ

三四三の節へおくづきおれり下は出づりく
 りづくへおせー送もえんはねだんくは
 佐合車うあさなひをーして笑ハおぐるを
 たらおの持の物より耕作をすまこバ年
 小水早乃うまくなく一蓋九種のみ又穀
 きのうはは極もせ今下めて次男よあう
 三此門弘うり病ぎん薬のこまんあ
 り縁はんやれ家とあましく穢よ佐公
 せんごなまこバウ驚のせの致室ーくくは
 皆人秋者ごうれあーままをまふにきめ

あーおひうあうまじく還てういづひ
 かしー佐公やまぬんぬゆゆはゆはゆは
 難ーあだつこらあゆのハ自業の体
 らうせあうひハ火難あいの大我んつ
 小過まへ余勢をうくさせおれり
 小あまをあへたぬ小難きうりあうの法
 むんなり

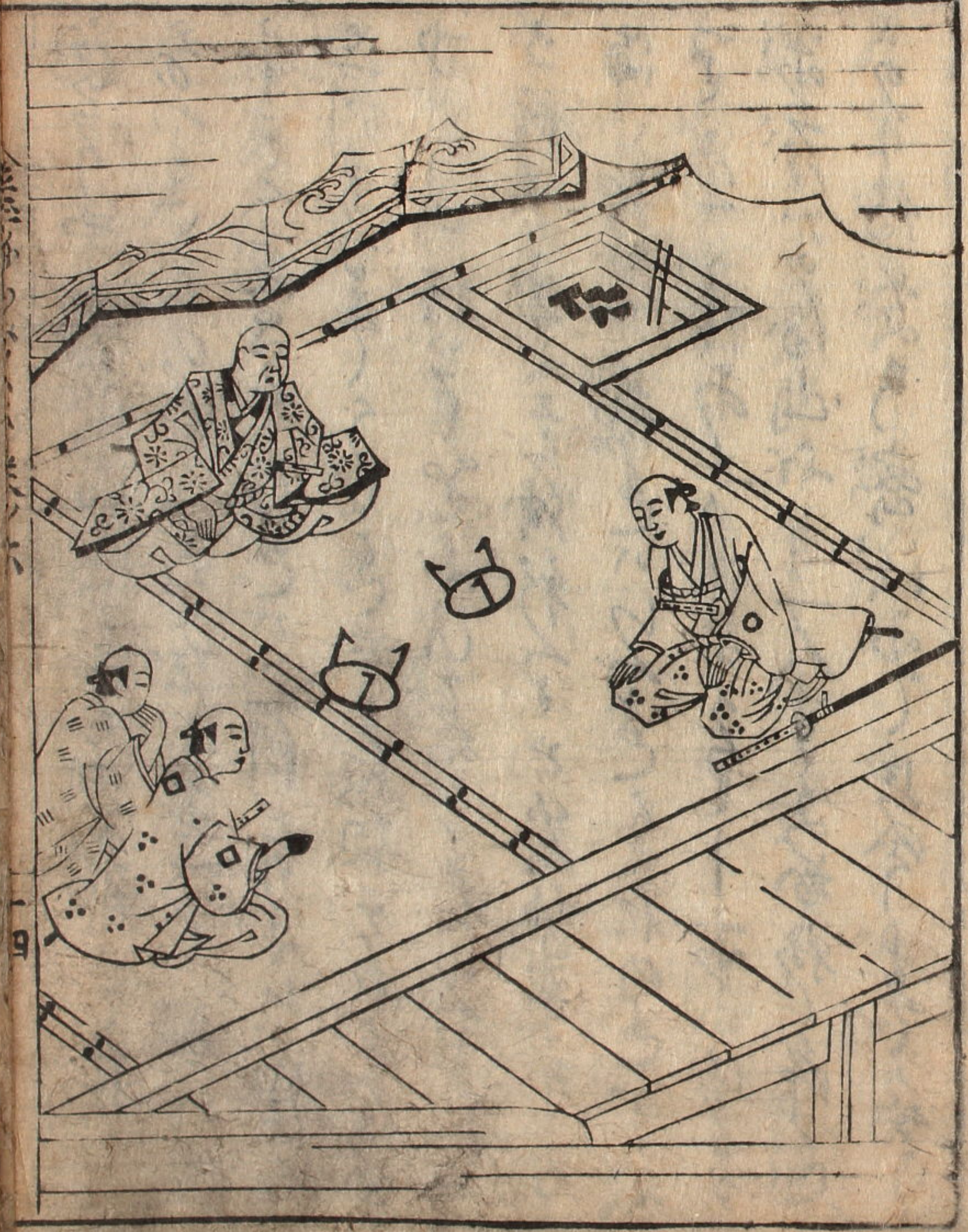
山が勅也入返ち夜の事

人の賢く愚ハ其ハ賢れ徳得みりつ
 たふ小治小持れくの天命と交わ

うんせひ色なり一其申よ勢ありん
 いふふ及たえれらうなりこそ目ら
 能ら一なきて事ふあて物ふ勤トぬ
 ハ其子の一世あり本田伝玄れ家老山
 中あゆ入遠乃花登城せ一守ふ上
 ち其のいりりめ者たる又こくたのまじ
 うの紀あて一其の男女たごらうと城人
 けらせて遠をよ其のゆと昔をれ六
 花彼ふらうとぎすや聞海らまで色
 な一とやうれ事ハものまこのひめて先

ハのいゆらなり一物あびたさへなり一
 一ととくゆとさうす事なりと
 御てあ一ぬ其の身ハまをん人あて
 させる用事色なりと一うご目め
 後一とやうく言ふみんで申は入ら
 ば又傳の事ハたうのそせだけく
 のあて物らと聞のこもい一又この
 事ハ同をゆ一にさあゆ海めて其の
 ハあ一ぬ目地まあなれらうと人
 色あびらう一み又とく勤あさる

どの女を嫁にしたいか
 一つは二つは三つは
 四つは五つは六つは
 七つは八つは九つは
 十つは十一つは十二つは
 十三つは十四つは十五つは
 十六つは十七つは十八つは
 十九つは二十つは二十一つは
 二十二つは二十三つは二十四つは
 二十五つは二十六つは二十七つは
 二十八つは二十九つは三十つは
 三十一つは三十二つは三十三つは
 三十四つは三十五つは三十六つは
 三十七つは三十八つは三十九つは
 四十つは四十一つは四十二つは
 四十三つは四十四つは四十五つは
 四十六つは四十七つは四十八つは
 四十九つは五十つは五十一つは
 五十二つは五十三つは五十四つは
 五十五つは五十六つは五十七つは
 五十八つは五十九つは六十つは
 六十一つは六十二つは六十三つは
 六十四つは六十五つは六十六つは
 六十七つは六十八つは六十九つは
 七十つは七十一つは七十二つは
 七十三つは七十四つは七十五つは
 七十六つは七十七つは七十八つは
 七十九つは八十つは八十一つは
 八十二つは八十三つは八十四つは
 八十五つは八十六つは八十七つは
 八十八つは八十九つは九十つは
 九十一つは九十二つは九十三つは
 九十四つは九十五つは九十六つは
 九十七つは九十八つは九十九つは
 百つは



あごうやぬんくほしくと田事あておろ
あごういたらのぬんくを極小盡ぐく 奥の座
ーとく極小のかけまじりしとこのみち極小ら
とどまらぬしとく極小の極小極小それあり
中北山休ごのよむび極小あり極小極小
か行方ぬてそ極小の事ゆん事なる
備の極小と極小極小の極小の極小
つとんて極小の事なること極小は
東屋かの極小一人すふ極小極小
よの極小の極小極小の極小の極小

れ事ごのぬんく極小の極小の極小
なるの極小の極小の極小の極小
極小の極小の極小の極小の極小
ららりぬらふだんごの極小の極小
て極小の極小の極小の極小の極小
それありぬんく極小の極小の極小
やごとは山ふの極小の極小の極小
極小の極小の極小の極小の極小
極小の極小の極小の極小の極小
ぬりていた極小の極小の極小の極小

驚かれて山休りするはゆりたくぬの子細
さうらたあはむのみさくをたぐせきま
りてうしつらとや先はつ後小奇氏の跡者
とわがしる百何後由海はよ新う出分
山極一は棟梁とぬらう一也を新たる出
あし積あし貴人のまへあらん事を歌し
あはれとく巧くもを伝ふとれ出城内
へはたのるべし跡をいぢりてさうひま
ゆき老のぬりなれは城のまじりせん
おんし料人といふあまき傳と傳へし

服たる後名前の穢として人々はいふるの
性あて又はまはいらかせ残るを
残ひゆおはまはらとて死すてせりあ
小お氣と後ち後く運のついでといふ事
かあさるゆお方便あられ還てらん
トあねはせんといふはひたふみ一幸
色らうらうみあの人とてふおあおせ
まを事をもつあつすあぬさるあれら
りしとてあ一はるねとあへのあのみ
白ゆせ一うは遠き表懐中一あははは

白ゆせ一うは遠き表懐中一あははは

のちげぞ乳刈ー其らつさむてハちんら
なんぢが祈禱せー日又も帰らうとては
せん小積さや乳ましうさるおとせし
ごのるうかこてはれどらー又はゆる
おー二天二天間やましくはゆるさ
物ふればぬをすまじごとくはゆる
あつさかどてはあつまじごとく
はあれどらー蟹ふくあびて魚れどある
又海や魚まじぐるの性ころー又ら
ありーむくくとれどらう揚くあ中

本りおぼろとなりー是れは山依おむ
りて備ふおふ備ふ子細あえー今
社の言ふのまじつらんあやうあ城の
あらんあらんあらんあらんあらん
備くを家親あまづーまじつらん
と再二二らんあまびーうとて
色あつさるあらんあらんあらん
物を敷うんせー草蜘蛛のあまふ
あつさるあらんあらんあらん
あまふあらんあらんあらんあらん

人の心は昔よりまよふもゆゑにすむべきありけり
 しとされぬ用公程のくまひにいとゆへ
 免罪となむちしむと申す申す申す申す
 申す一とと退教一ぬさふの道花智徳か
 うといふといふといふといふといふといふ
 といふ隣りの心はわづらひぬるなり

御心はまよふといふはたか



